

米山梅吉記念館 館報

2015
(平成27年)

春

Vol. 25

創立45周年記念式典



平成26年9月13日、米山梅吉記念館の創立45周年記念式典が、全国から約120名の参加者を得て開催されました。式典では、過去5年間に記念館に貢献された個人14名、法人17団体に対して、功労者表彰が行われました。

続いて、三井住友信託銀行より白滝幾之助画伯制作の米山梅吉翁の肖像画が授与されました。これは、長く三井信託の社宝として社長室に掲げられていたもので、これまであまり一般の目に触れる機会のないものでした。

次に、米山梅吉翁の動画が放映されました。これは昭和8年ロータリー第70区第五回地区年次大会の様子を写した貴重な映像です。参加者のほとんどの方が動く姿の梅吉翁を見るのは初めてのこと、大いに盛り上りました。

記念講演は、三井報恩会監事 藤井健氏より、三井報恩会についてのお話、そして、三井報恩会と特定振興村を考える会会長 長澤聖浩氏によって「三井報恩会と岩手県彦部村」と題して行われました。

様々な形でご縁を得た人々が各地から集い、賑やかに45周年をお祝いしました。



公益財団法人 米山梅吉記念館



館報第25号に寄せて

理事長 渡邊脩助

早咲きの伊豆河津桜が満開を迎えたところに、3月の爆弾低気圧による記録的な暴風雪で、近づいてきた春が逆戻りしてしまいました。記念館からの富士山は、まだ深い雪に被われておりますが、雄大で美しい姿を見せております。

全国のロータリークラブ・ロータリアンの皆様、年度終末そして新年度に向かってのご準備で日々ご多忙のことと存じます。記念館への日頃のご支援ご協力に感謝とお礼を申し上げます。

創立から45年たちました記念館には、全国のロータリアン、米山奨学生を伴った各地区の米山記念奨学委員会、移動例会と来館者は年々増加傾向です。ようやく館の認知度も上がってきたかと思っておりましたが、未だにこの記念館が米山記念奨学会の付属の施設と誤解している方が非常に多いことに驚いております。我々記念館のPR不足か、館への認識の不足か、記念館の独立性を認識して頂く必要性を痛感しております。

日本ロータリーには米山を冠名とした組織は、ロータリー米山記念奨学会と米山梅吉記念館の二つがあります。これらは全く別々に独立した公益財団法人であります。奨学会は文科省で、記念館は静岡県の認可であり、お互いの財源も規模も運営も全く異なった組織です。

記念館の運営は全てロータリアンからの浄財で賄っておりますので、今後共ご支援のほどお願い申し上げます。

春季例祭は4月25日(土)に開催します。記念講演は「里はまだ 夜深し一江川英龍の時代ー」と題して、NPO法人伊豆学研究会理事長、橋本敬之氏にお願いしました。伊豆地方の歴史研究家であり、世界文化遺産に申請している「垂山反射炉」の関係者

でもあります。

記念館では創立50周年事業委員会を立ち上げ、計画の検討に入っております。2019(平成31)年9月の秋季例祭に行う予定です。

記念事業計画のうち主なものは、築十数年たちました新館の設備の老朽化、特に空調設備、展示室及び展示品の更改です。展示室は開館以来一度も模様替えをしておらず、ロータリー50周年以降のパネル、2000年以降のガバナー名表示板の追加、展示品の更改などを予定しております。記念出版としては「米山梅吉物語」を小学校高学年以上の学生を対象とした、日本の人物ものがたりシリーズの一環として、銀の鈴社と出版契約を交わしました。その他、在日米山奨学生による座談等の会議も計画しております。

記念館50周年は2019年であります、翌2020年は日本のロータリー100周年、東京RC100周年、東京オリンピックの年であります。大変賑やかな、活気ある年度となることを祈念しております。

2015年度国際ロータリー会長はスリランカ出身のK.R.ラビンドラン氏であり、テーマは「Be a gift to the world 世界へのプレゼントになろう」と発表されました。最も主要なチャレンジは、25年以上前(1985年)に世界に約束したポリオ撲滅を成しとげることであります。

記念館の運営が益々厳しく複雑になってきております。創立50周年を目指してスタッフの強化と財源の確保に向けて積極的に活動し、館の認知度を高めて行きます。

日本のウォリングフォードと言うべき聖地・米山梅吉記念館に「米山説」をして頂けるよう務めまいります。皆様のご来館をお持ちしております。



公益財団法人 米山梅吉記念館 創立45周年記念式典

日 時 2014年9月13日（土）
場 所 公益財団法人米山梅吉記念館

式 次 第

開会の辞
式辞
来賓紹介
功労者表彰
肖像画贈呈式
《寄贈者》
来賓挨拶

公益財団法人米山梅吉記念館
公益財団法人米山梅吉記念館
公益財団法人米山梅吉記念館
個人 14名 法人 17団体
米山梅吉氏肖像画（原画）

三井住友信託銀行株式会社
R I 第2620地区
ロータリー米山記念奨学会
東京ロータリークラブ
公益財団法人米山梅吉記念館
米山梅吉翁映像 斎藤 寛記念館

副理事長 積 惟貞
理事長 渡邊 脩助
副理事長 積 惟貞
名 譲 顧 問 藤井 健 氏
直前ガバナー 志田 洪顯 氏
直前理事長 板橋 敏雄 氏
副会長 岡崎 幸雄 氏
常務理事 井上 雅雄
館 長 佐々木政明 氏

特別記念講演

「三井報恩会」について 一般財団法人三井報恩会

監 事 藤井 健 氏

「三井報恩会と岩手県彦部村」

三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会会長

長澤 聖浩 氏

懇親会

米山梅吉記念館功労表彰

（敬称略・順不同）

● 特別功労賞

谷内 宏文（東京日本橋プロバス）

● 功労賞（個人）

浅田 光二（志木RC）
麻生 泰成（豊岡RC）
大野 数芳（沼津北RC）
小山田 浩定（福岡城西RC）
加藤 義朋（福島RC）
後藤 全弘（沼津北RC）
小林 俊（沼津北RC）
志田 洪顯（静岡RC）
積 惟貞（沼津RC）
永野 一好（横浜瀬谷RC）
長峯 基（都城RC）
米田 真理子（堺フェニックスRC）
米山 晴敏（せせらぎ三島RC）

● 功労賞（団体）

熱海南RC
伊豆中央RC
塩山RC
株式会社サインズアース
御殿場RC
静岡西RC
島田RC
城山産業株式会社
須賀川RC
税理士法人奈良橋・山本会計事務所
東京RC
長泉RC
沼津RC
沼津北RC
沼津西RC
浜松西RC
三島RC

記念講演



三井報恩会と岩手県彦部村

長澤 聖浩

（三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会会長）

私の住む岩手県紫波町は、人口約32000人の農業が主体の町です。紫波町の誇れるものはヒメノモチという餅米の日本一の産地です。その他リンゴや葡萄等岩手一の果樹の町です。現在は盛岡市のベッドタウンとして発展しています。

三井家は延宝元年三井越後屋として創業し、当時の常識をくつがえす現金掛け値無しという商法で江戸を代表する大商人となりました。明治時代には三井合名株式会社を作り広く事業を展開し、日本を代表する企業として国内外で活躍し財閥の設立にいたりました。ところが財閥だけが利益を独占するという批判が高まり、三井合名の理事長田琢磨が暗殺されるという事件がおこります。これにより状況が一転。経営方針を大きく転換し3000万円という多額の寄付をして、昭和9年三井報恩会という社会事業団体が設立されました。その初代理事長が米山梅吉でした。当時東北地方の農村は非常に苦しい状況にありました。経済恐慌による生糸価格の大暴落、三大銀行の破綻、昭和8年3月には三陸沖地震ということで甚大な被害があったわけです。昭和9年には東北地方が大冷害という大変な時期でした。

岩手出身の宮沢賢治の作られた詩の中で最も有名な詩が「雨にも負けず～」ですが、「寒さの夏は」という表現があります。「寒さの夏」とは冷害を表しています。特に天保時代には7年間冷害、干ばつ、洪水が続き米がとれなかった。農民の約半分近くが餓死したと聞いております。昭和9年の大冷害にはここまでのことはないですが、生活に苦しみ娘の身売りや欠食児童が多く社会問題になったのです。この際、救いの手

三井報恩会は、被害の大きかった青森県と岩手県から1ヶ村ずつ経済更正のモデル農村を指定することになり、青森県西平内村と岩手県紫波郡彦部村を指定しました。彦部は昭和30年町村合併により現在は紫波町彦部地区となっています。彦部地区は現在世帯数約600戸人口2500人ほどです。指定当時は戸数約400戸の小さな村でした。平内町（旧西平内村）は青森市の東、浅虫温泉から4～5kmの地域で人口12000人、農業と漁業の町で、養殖ホタテが有名です。彦部は大きく4地区に分かれています。寛政時代より米作りが盛んな所で、北上川から運ばれた肥沃な土壌によって米がよく実る地域で、大冷害の際も、比較的米がとれた地域です。種糲がなくなった地域に彦部から渡したという歴史も残っています。昭和10年2月に三井報恩会より農村振興モデル農村に指定を受け、指定伝達式では、全戸主の「誓いの詞」をお供えをして、まちがいなくわたしたちは報恩会の指定を受け邁進していきます、という誓いをたてたものです。

彦部村は昭和10年から15年まで指定を受けました。当時の村の年間予算が21700円の時に、報恩会様より五ヵ年で35800円という巨額の資金を援助されました。彦部村で行われた事業は、大きく4つです。

一つめが、指導組織の構築。村内15地区で実行組合を組織し、農作業を共同で行い、毎月常会を行いました。当時の実行組合は、現在も存続しています。二つめは農業生産。薬製品の生産、羊や綿羊を飼ったり牛のための薬製品を生産して副収入をあげました。三つめは産業組合の経営内容を改善。一度破綻した農業協同組合を立て直しました。四つめが生活改善指導。台所の改善と「農繁託児所」を開設しました。事

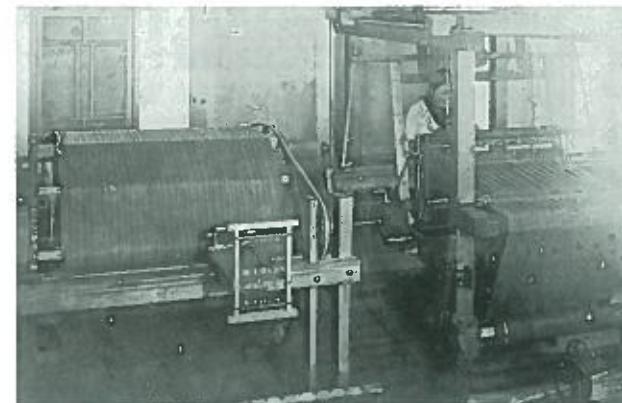
秋季例祭

秋季例祭

業の中心は乳畜業での副収入の確保に主眼がおかれたようあります。畜産は寒い時期にもできるので、気象条件に左右されない農業経営を目指すのが一番の目的だったようです。

当時の村長佐藤定八さんのお宅にアルバムがあり、ここに当時の写真が遺されていました。まず、獣畜農業の推進ということで、報恩会がオーストラリアやニージーランドから輸入した綿羊100頭導入。当時どうやって運んできたかというと、東京から貨車で紫波町まで運んできた。そこから彦部村まで約4km、トラックがないので歩いてきました。橋のたもとに子どもたちがいますが、このこどもたちは今ご健在ですと90歳くらいです。

ホームスパンの加工場は、染色、機織りといった全行程ができる施設です。岩手の他の村の多くの娘さんが彦部に学びにきたそうです。秩父宮殿下に献上するという栄誉も得ました。



機織り作業〔昭和10年（1935）頃〕

ホルスタインは北海道の町村牧場から来ました。このホルスタインからバターの生産が行われました。しかし、当時バターを食べる習慣がなく、ひとつも売れなかつたそうです。盛岡の一件あった洋食屋さんで使っていただきましたが、使う量は少ない。売れなくて困っているときに、米山梅吉さんは温かい方で、このバターを購入して販売をしていただいたというエピソードも残っています。

共同作業所では、村の女性達が集まり、「むしろ」や「かます」などの生産を行いました。当時農家の女性は旦那さんがお金を握っていて、

ただただ働くだけでした。三井報恩会の支援でこの作業場ができて、むしろなどを作ることによって収入を得ました。この加工場に、私の曾祖母もお世話になりました。作業員の方の慰労会があったそうです。曾祖母が慰労会が終わり家に帰って「変な料理が出てきた。御飯の上にどろどろしたものをかけて食べた」と話しました。それが今考えるとライスカレーでした。これが彦部村に初めてライスカレーが入ったときでした。生野菜に初めてソースをかけて食べたという逸話も聞いております。こうして村の中は大いに変わっていったわけです。

また、春の田植えと秋の稲刈り時期の2回、こどもたちを小学校で預かる託児所を設置しました。当時の農家は、一家総出の作業で、子どもをどう保護するかが一番の問題でした。若い奥さんも働き手であったため、乳幼児を「いざこ」というわらで作ったまるい中に縄でしばつて家の中に置き去りにしていた。もう少し大きい子どもは、家の柱に結わえつけておいた。そんな時代でした。これはよくないということで、岩手県で初めて彦部に農繁託児所ができたということです。

報恩会の助成をうけたことを記念して村の通りの真ん中に標柱を立てました。高さ3尺直徑30寸くらいの大きな塔頭に白ペンキをぬり、その上に黒ペンキで描いたものです。彦部を通る他の村の方が見て「たいしたものだ」と評判になったそうです。これが村の方々の誇りになりました。それまでは冷害に苦しむ何もいい所がない、自信がもてない、このとき様々な事業を行って各方面から注目をされました。自分達の暮らしも確実によくなり、標柱で他の村からも注目を集めました。そして岩手県の農村の模範となりました。

昭和11年6月7日、米山梅吉理事長はじめ報恩会の役員の方々が彦部を訪れました。このとき米山さんは彦部村をくまなく視察されました。彦部小学校に米山さんがいらっしゃって、こどもたちにビスケットをおみやげに持ってきたそうです。これは米山さんのポケットマニーで買っ



彦部繁農託児所〔昭和11年（1936）頃〕

たものらしく、小学校全校児童一人ひとりに一箱ずつもってきただという逸話がございます。現在彦部小学校は生徒約50名ですが、当時は約180人。180人全員に東京からビスケットを買ってきました。当時子どもたちはビスケットなど見たこともない、ましてや毎日食べる御飯もない時で、大変驚いたようです。当時のことを覚えて居る方が何人かご健在です。今でも強烈な印象で覚えていらっしゃって、形、色、チョコレートがかかっていたことまで覚えています。今でも心の中に大切にしまっているのであります。

5年間の経済更正活動により、彦部村の村民所得は約2倍に増加。それにより生活に余裕ができ、余裕のできたお金で自転車を買い、自転車クラブまででき、夕方になると自転車乗りの練習会をしました。こうして彦部村は生き生きと蘇っていったわけです。紫波町は2016年開催岩手国体の自転車会場に選ばれております。これも何かのご縁かなと思います。

指定が終わった昭和15年には太平洋戦争が始まります。さらに戦後には財閥解体があります。彦部村と三井報恩会の関係は全く途絶えてしまうわけです。

それから時代を経て70年後、平成18年より彦部地区では地域の歴史を知ろうということで、歴史研究会を結成し、様々な調査研究をしています。私も一員です。佐藤村長さん宅にお邪魔した折り、三井報恩会の資料が出てきたわけです。そこから興味をもち、平成23年2月、米山

記念館と三井報恩会に連絡をしました。このとき70年ぶりに交流が復活しました。『三井報恩会と岩手県彦部村』という本を発行します。これは三井報恩会が彦部村で行なった事業をまとめたものです。この本を、三井報恩会と米山梅吉記念館に寄贈しようということにな

ります。これを契機として、彦部地区では三井報恩会と指定振興村彦部村を考える会を組織し、さらに調査を進めました。このなかで、三井報恩会と記念館に感謝しなければ、という声がおこったのです。木柱は時を経て朽ちてしまった。そこで、もう一度あの木柱を復元しようと。古い写真の字を拡大し、当時とまったく同じ字を彫り、木柱を石柱にあらため、台座には当時の経緯を書いた銘板を付け建立しました。平成26年は三井報恩会設立80周年の年にあたり、6月11日に建立式典を行いました。昭和11年に米山梅吉氏がいらっしゃったのが6月7日で、それを記念して近いこの日を選びました。青森の平内村、静岡の米山記念館、これらの方々との交流を続け、地域の活性化に繋がれば、と考えております。



新設の特定振興村碑

米山梅吉の文学的知友への思い



I 米山梅吉の漢詩文に見る出郷

沼津兵学校は明治元年に、西周を頭取として発足したが、同4年に廢藩置県により4月

9日、兵部省に移管、「陸軍沼津出張兵学寮」と変更、同5年5月に「陸軍士官学校」等に合併、教授や生徒も上京して解散のかたちになったという。

米山梅吉の『幕末西洋文化と沼津兵学校』でも「政治に次いでこの時、文化の奉還も行った」として、これを「徳川氏第二の奉還」と述べている。その後、「集成舎」から明治9年に当時の学制によって、設立したのがいわゆる「沼津中学校」であった。

米山梅吉は明治14年に、その沼津中学校へ入学。いわゆる沼津兵学校の名残りを継承するような中学校で、江原素六が校長であった。当時郡長となり、後に江原は衆議院議員に当選、東洋英和、麻布中学校等を創立した青年達の敬仰すべき大人物となった。

その継承者として名和謙次が校長となった。江原の後を継ぐすぐれた漢学者であった。名和眠山とも号しその『修身訓蒙』の著書は同中学校でテキストに使われており、内容は古風なものではなく、西洋の故事が沢山扱われており、むしろ漢学者の著書としては異色の感じを受けたといわれる。

名和についてのユニークな人物像について、樋口雄彦著の『沼津兵学校の研究』によれば、名和は廃刀令の発布前に、丸腰で三島神社を参拝して物議をかもして有名になったり、沼津中学校の生徒達に、演説社の「観瀬社」を結成させ、時代の先端を行く進歩的な人物として知られ、当時の民権運動にも参加していたとのことである。特に『修身訓蒙』の著書の内容について

関口昌男

(沼津史談会前会長)

ては、先きの『沼津兵学校の研究』に詳しいので参照されたい。

若き米山梅吉らも、進歩的な名和の影響を強く受け、漢学および漢詩の素読やその創作の指導等を受け、表現の知識と喜びを得たものと思われる。後の米山梅吉の和歌や散文等に作文の実力とともに、漢文や漢詩の読解力および、その表現力と創作意欲のみならず、多くの関係作品と関係著作を世に送った業績は、銀行家や実業家であるとともにマルチ的な実力者として周知の通りである。

やがて米山梅吉が16歳になった明治16年秋の頃に、沼津中学校を辞して、箱根を越えて東京に赴いた折のよく知られる七言絶句がある。

赴東京

書劍辞郷意氣豪
何曾前路念違遭
秋風十里函閥險
遙望皇都天色高

その中の「書劍郷ヲ辞シテ意氣豪ナリ」にみるように、長泉の米山家からの出郷の強い決意が窺われ、「秋風十里函閥ノ險」と述べ、険しい箱根を越えて、「遙カニ望ム皇都天色ノ高キヲ」と言い、学ぶべき青雲の志への期待の大きさが想像されるではないか。東都で身を寄せるところが確定していたわけではなかったらしい。当時の稻村真里宛て米山梅吉書簡等の文書からも推察することができるが、明確ではない。これは大きな転機であり、無断で突然の米山家を出帆と推察される。

明治16年といえば、東京から横浜間に汽車は通じてはいたが、駿東の長泉から東京までの徒步ならば、およそ三日間はかかったに違いない。16歳の米山梅吉少年の決意と苦難のほどは測りしれないし、相当な難儀なものだったろう。す

べて悠々たるものではなく、一途な涙ぐましい決意による上京であったことが窺われる。

II 横豊作詩集への米山梅吉の漢文の序文

米山梅吉と同学年の横豊作(不言舎)も、明治元年の生まれで、沼津中学校に在籍。この名和謙次の漢文の授業でともに学んでいた横豊作は、後に東京済生学舎で医学を学び、沼津でその父横正覚とともに横医院を開業。後にアララギ歌人としても名をなした人物である。米山梅吉と横豊作との接点は文献的には見当たらぬといわれていた。

米山らの沼津中学校での先輩にあたる三島出身で医科大学別科の学生の波多野弥五郎の世話を受けたのは幸運だった。米山の長兄栄次郎の妻の兄の望月功が神田に下宿しており、彼が横豊作と同じ東京済生学舎に在籍していた。その

辺の接点の可能性を考えられると思う。実は、

横豊作の漢詩集『綠山文集壱』等の複数の漢詩集が見つかり、その『綠山文集壱』(明治十八年四月平民著横豊作)の中に、和田梅馨(米山梅吉)が序文を書いているのを見た。少し長いが紹介してみよう。

余嘗以綠山之父此於梅桜客評而問之余日綠山之父以嚴正之筆論古今之得失以流麗之筆記奇絕之山水如梅之傲雪如桜之祭爛是余之所以綠山之父此於梅桜也客無以答矣頃者綠山集其父徵言於余抑余知綠山者知其年若而能父如斯他故若使綠山年益老吐綺露榮愈多則將凌轉鼓浪駕柳飛去豈溢言哉乃記曾與客所評綠山之文者以為序

明治十八年四月下灘 於淡山樓

友人 和田梅馨識



「綠山之父」とあるのは横豊作の父で、当時片浜に住む医師の横正覚のことであり、和歌や漢詩および俳句等の嗜みがあり、花卉に造詣が深く当地のバイオニア的存在の人物であった。その父横正覚の影響大なることを踏まえて、その文才を賞賛している内容である。米山からすれば、羨望的だったに相違ない。

この「明治十八年四月下灘(下旬)」といえば、その年譜等で見られるように、米山梅吉が東京府吏員採用試験に見事合格して、和田の母堂と芝愛宕町2丁目に居住していたところである。まだそのころは「和田梅吉」と旧姓を自称しており、先の「和田梅馨」は、米山梅吉の雅号として署名しているものであろう。

若き日の梅吉の漢文や漢詩の表現力の高さはすばらしく、平仄、押韻、対句等がまもられており、その表現力には驚くべきものがある。

III 和歌に見る知友への思い

和歌や漢詩漢文へ熱中する明治の時代的機運が隆盛となり、その知識や表現技術および創作への情熱はただならぬものがあった。

米山梅吉も良き師や学友に囲まれながら、文学的研究と創作に意を注ぎ、表現への喜びにひたる若者の一人に違ひなかった。後に多くの著作を著したのもその延長線上の成果だといえよう。

銀行家で、かつ優れた実業家でありながら、珍しく多くの著述や歌集等々をものし、若き日の沼津中学校時代に、その礎を培ったであろう素地からの開花と見ることができる。特にその中で人間関係に見られる和歌を抜粋してみよう。ここでは、佐木信綱の和歌実作の指導を仰ぎながら、歌集ができたと述べているので、佐々木邦著『米山梅吉伝』の「藍壺文藻」の歌集『四十雀』(大正7年6月3日刊)『和歌選集一』『和歌選集二』『俳句選集』『漢詩選集』等から抜粋してみよう。

大正九年

角田浩々歌客を憶ふ

春は四たび來にけり春は君ゆきて寂しき今日の時しる雨に

昭和六年
寄せる稻村宮司[沼津中学校同窓の稻村眞里、國學院で学び、二荒山日光の宮司となる]

雪の如 いともすがしく 玉の如 いともま
とかに うるはしき 君がさがはも いとけ
なき童児の頃ゆ うちよする 駿河の国の
ふるさとに たたへられにき 神富士を あ
ふぐ沼津の 学舎に 君を知り初め もろと
もに 老いやく今日も へだてなき 友とし
睦ぶ わが幸おもふ
八束穂の 稲村わが兄 父母に よくも仕へ
つ 学びの道 一すぢにふみ 言拳の 文に
も秀で いつかせを 驚かすべく 高きにも
のぼる人ぞと その光 望みし月は うき雲
の 君を病の 人ととざしつ
いく年を つくろひし君 敏心を つつむと
なしに うつし世を 厥ふとなしに ゆく水
の 清き川原に その身をば みそぎし清め
五十年の さだめをさとり 身を一つ
ささげまつりぬ 神の御前に たらし姫 い
つく香椎 神籠石 めぐらふ高良 富士の嶺
の ふもと大宮 二荒の 山祇の宮 宮々に
いそしみ仕へ 心今は 安房のやしろに
くもりなき 天を仰ぎ 神國の みなもとを
説き 人の知り 知らぬもよそに まどかに
も すがしき君は しづかにをり

反歌

神垣のもとに身をよせ白真砂ふみて立てせる
人の尊さ 富士の嶺
富士の嶺の夕空遠くふくらかに今日はいちじ
ろし雪はましけむ

昭和七年

佐佐木博士選舉の賀に[佐佐木信綱は国文学者、歌人で有名な歌誌「心の花」の主宰]
やまとみ国つくりなすべき一人とて竹柏の園
生に君は若えつ

昭和十一年

福岡にて大隈言道翁の旧居を訪ひて
人知れぬ身を高しとそ思ひし君が庵の流にわ
れをうつしつ
同じく野村望東尼が在りし向凌にて[幕末の女流歌

人で、高杉晋作や西郷隆盛と交わり庇護、の
ちに姫島に流刑された。】
門辺には大き足跡の猪やあると訪ひ来つ君が
ここのかくれ家
昭和十二年
佐佐木博士の文化勳章を受けませるを寿ぎて
この春はまた新たにも君が園に花橘の香もた
かくして
昭和十三年
秋田の老農石川翁の旧迹を訪ひて
天地のめぐみは糧にあまりありたくはへば
と大人は訓へき
石川家の当主太郎君より故翁が用ひし杖一も
とを得て
わがものと今日よりめづるこの杖に老翁がふ
みしあと追ふよしもがな
昭和十七年
遠塚麗水の逝けるに[駿河の国小諫訪で生まれ、
苦学して小学校教員、漢詩文に優れ風評が高い]
逝く君がのこしし筆はかがみとぞ富士の高嶺
の美しさふみ
[昭和二十年二月十一日、紀元節の佳節に、全
国疎開学童に対し、次の和歌と御菓子を下賜
りされた。]
つきの世をせおうべき身ぞたくかしこく正し
くのびよ里のうつりて
[それに対して、米山梅吉はお応えするべく次
の和歌を詠んでいる。]
皇后のみ旨かしこみたくましく
正しくのびむ誓ふ児らはも愛しき児ら家路を
遠くつぎのせを
さらに、一方で藤野文彌の「米山さんの感激、
恩情」の追悼文のなかにある[歌集にはない]この
藤野文彌宛て米山梅吉書簡[昭和二十一年二月十
八日付の文面に次の日本の敗戦を嘆く短歌あり。]
國たみの誰かは泣かぬものあらむ昭和
二十とせ八月十五日
堪へがたきを忍べの玉音かしこくもラジオ
にあふれ国民の耳に
天皇に何の罪かはおはしまさむ敗戦はたゞに

臣の咎なる

重き大臣集ふと知りてことのよしを知るよ
しなき国民のうらみ
国民は欺かれし如降参のみじめさに立つ昨
日今日かな
撃てし止まぬ戦ならぬこの四年言の葉うらに
かくれし戦
拭ふべき人の言葉に行ひに深くそみにし軍
國の色を
つはもののかげはなみすれ百年をまたでや
すらに榮えむこの國

梅吉は、このように日本の敗戦を憂いつつ、
この手紙を書いた二ヵ月後に惜しまれながら永
眠した。その追悼文によれば、かつて梅吉が揮
毫した「無事是貴人」をいただいた藤野文彌は、
人生の師と仰いだ米山梅吉の人生訓のそれを軸
に設えて床の間に掛けて故人を偲んだよし。

昭和十六年春、三井銀行在職時代の牧野俊之
は後に日本石油精製会社取締役となった彼が米
山を訪問の折り、日頃の不平をぶちまけた時に
いただいた色紙の一首との文言があるとのこと。

また、牧野俊之の「米山先生と私」の追悼文
にある色紙の歌がある。「[文藻]にはない歌]
うち向ふ鏡のおものくもりなばぬぐひて猶も
我を見まほし

この色紙を東大出身の秀才に「まあ辛抱する
ことだ」と諭し、梅吉も「同銀行内の某を算盤
で思いきり殴り、その後で銀行を辞めようと思つ
たこともあるが、じっと辛抱したよ」と慰めて
忠告してくれたお陰で、牧野俊之の今日がある
と感謝に満ちた書簡文がある。

このように和歌を見る米山梅吉と、直接に関
わりのあった人物との回想や追憶のよすがとなる
短歌の位相があることに頷くことができる。
特に佐佐木博士のように直接的な和歌の師匠と
しての交流のあるなかで、和歌でのやり取り、
意思の疎通としての和歌の実作とその遺された
作品としての存在感の意義は大きい。関係のあつ
た人物との動静が見られ、散文にはない詠嘆的
な思いの丈をこめて、その折々の感懷がみられ
て、その余韻をも含めた余情まで伝わるもののが

ある。

IV 文人墨客を詠んだ俳句

一俳句選集「藍壺」より一

悼友 散る花に月の下行く人遠し

中津なる福沢先生の旧居にて 梅の花この一もとの香かな

懐竹冷

十歳にして俳人の名を星祭り

小波還暦[巖谷小波は、明治三十年、木曜会と
いう連座を開き、西村渚山、黒田湖山らと米山
甚句《小波が命名》も参加]

正岡子規

還暦や夢を馬上に秋日和

昭和十九年十一月二十九日、長泉下土狩より伊
豆湯ヶ島落合樓 緑岡疎開学園の小宮山伍助宛
米山梅吉書簡の「別餞」と題する俳句四句。

別餞

山茶花や夕闇の庭に星むるる

秋日和難を避け来し兒らにこそ

敵機児ゆ秋晴の空の勿体なさ

百日紅の肌を削りて秋の雨

昭和二十一年一月二十六日、長泉下土狩発、日本橋三
井報恩会の服部正平宛米山梅吉書簡での応答の二句。

寒月の懸る木もなく焦土哉

寒月の照りそう焦土香るまで

本居大人の墓にて

この奥に大和心や花の寺

中津なる福沢先生の旧居にて

梅の花この一もとの香かな

このほか、米山梅吉の俳句には、まだ多くの
関係作品がある。最近刊行された井口賢明編纂
の『米山梅吉俳句集 藍壺俳句』は最も原作に
忠実なものだと思われる。それらをもとに、今
後さらにくわしく鑑賞しながら、その俳句に纏
わる研究をしていきたいと思う。

米山梅吉記念館春季例祭

お知らせ

日 時 平成27年4月25日(土) 午後2時~

場 所 (公財)米山梅吉記念館ホール

新幹線三島駅よりタクシー5分 東名沼津ICより15分

内 容 例祭

講演 [講師]橋本敬之 氏

NPO法人伊豆学研究会理事長

[演題]「里はまだ夜深し一江川英龍の時代ー」

アトラクション

コール・アルカディア(混声アンサンブル)

懇親会 講演者、参加者と一緒に懇親 登録料無料

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

米山梅吉記念館のご案内

●開館時間●

午前10時~午後4時

●休館日●

- 月曜日
- 12月28日~1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 25

発行日 平成27年3月25日
発行者 公益財団法人米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
印刷 フタバ印刷株式会社